

第 75 号

2010.6

伊藤外科ニュース

<http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp/index.html>

ワールドカップの季節に想う



いよいよサッカーの世界カップ大会が始まります。

私は、東京オリンピックとメキシコオリンピックのサッカー日本代表(当時はアマチュアでした)の活躍に感激して、小学生の頃からサッカーを始めた年代のひとりです。当時のサッカーの映像がときどきテレビに映されますが、まるでスローモーション映画のようにゆっくりと試合が進み、ほほえましく思います。

野球と違い、サッカーの試合ではなかなか点が取れません。サッカーが盛んな欧州や南米の人々は、そこらへんをよく心得ています。だから、応援しているチームの得点に熱狂するのは、点が取れないことを我慢してきた感情の爆発なのではないでしょうか。日本ではあまり日の目をみなかったこのスポーツも、Jリーグの開幕から人気が出ました。しかし、最近の日本代表の試合を観ると、世界の強豪国との実力の差に唖然とし、サッカー王国の歴史の重みをあらためてひしひしと感じます。百年後には、強い日本代表チームになることを祈りつつ、今年の世界カップもテレビ観戦したいと思います。



地域の医師の「役に立てること」

さて、先月号に載せましたように、国民健康保険の方の健康診断が始まりました。普段、体調に不安があるかたはもちろん、体に自信のある方も、年に一回の体の車検を受けましょう。特に40代以降の方は、ガン検診を受けられることをお勧めします。

申し込み方法がわからない方は、



当院スタッフにお尋ねください。

また、話が変わります 私は以前から、患者さんご本人や家族の希望があれば、生まれ育った地域や住み慣れた家で人生の終焉を迎えるのはすばらしい事と考えています。淀橋の地元に戻ってから最初の5年間に、私も8名の顔見知りの患者さんをご家族の方とともにお見送りしました。しかし、以降は主に、家族の介護事情により、在宅でお見送りすることがほとんどなくなり、終末期の医療を患者さんの日常生活の場ではない病院で行うことがほとんどです。

伊藤外科は国が定めた在宅支援診療所(24時間365日、在宅の患者さんに対応する診療所)でもなく、また、特殊な先端医療を行っている医療機関でもありません。しかし、地域の医師として可能な限り、患者さんの役に立ちたいと思っています。自宅で余生をゆっくり過ごしたい方は、ご遠慮なく相談してください。ほんの少しではありますが、お役に立てることがあるのではないかと考えています。

(院長)



今回の一冊

三弓先生の本棚



『還暦以後』 松浦 玲

還暦 いわずと知れた満 60 歳 (数え 61 歳) の人生の節目である。織田信長が「人間五十年 ~ 」と謡った時代とは異なり、今の 60 歳は円熟味をさらに増していく年代でありましょう。

「還暦」とは読んで字のごとく、「暦 ~ 干支 ~ がもとに還る」ということである。干支といえは「ね・うし・とら.....」であるが、若い読者のために記しておく、正確には 10 の干 (甲・乙・丙などの十干) と 12 の支 (子・牛・寅などの十二支) の組み合わせのこと。この組み合わせは 60 通りあり、還暦の年に、生まれ年と同じ干支を迎えるので、「暦が還る」というわけだ。ちなみに、今年還暦を迎える人が生まれた年・及び本年の干支は「庚寅 (かのえ・とら)」。

と、すっかり前置きが長くなりましたが、幕末の人物伝を多く記す文筆家・松浦玲氏の『還暦以後』(ちくま文庫)である。勝海舟、徳川慶喜、山形有朋、渋沢栄一など、幕末期から明治、大正、昭和に生きた 27 名の、還暦以後の人生にスポットを当てている。明治といえば、織田信長が没した本能寺の変から 300 年のちの時代だが、明治 30 年ですら、平均寿命は男性 42.8 歳、女性 44.3 歳。この時代の人々の「還暦以後」はすなわち、「人生の晩年」である。(ちなみに、奥付の発行日から推測すると、三弓は本書を 77 歳以降に読んだらしい。)

本書のなかの幕末の重鎮たちだけを拾ってみてもおもしろい。維新三傑とよばれ、明治新政府の中核となった西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允は 50 歳に届かずして、明治 10 年あたりで没している。一方、徳川幕府方では、城を捨て自ら謹慎した最後の将軍・徳川慶喜と、江戸の無血開城を成し遂げた勝海舟は、ともに「閏末 (幕末をもじった、「薩長藩閏の末」を意味する言葉)」を見届けるように 77 歳まで生きた。

勝海舟が没したのは明治 32 年。その前年に、長きにわたり静岡で隠居同然に過ごしていた徳川慶喜が、維新後初めて、かつて江戸城だった皇居に参内し、明治天皇と面談している。この時、慶喜、61 歳。これによって慶喜は、長きにわたる朝敵の汚名を返上することができたわけだが、この面談は海舟の尽力によるものだった。海舟より 14 歳年下の慶喜は、明治天皇の崩御、つまり明治時代の終わりを見届け、大正 2 年に没している。

同時代をすれ違いながら生きた人々を、「還暦以後」という目線で切り取った本書は、早くに名を成した人々の晩年の姿が垣間見えると同時に、あらたな視点で「幕末 ~ 明治 ~ 大正 ~ 昭和 (戦前)」という時代を伝えてくれる。ぜひ、ご一読を。

ところで、還暦について、おまけの話。12 年に一度巡ってくる、生まれ年と同じ干支の年 (ここでは、ね年とかうし年のことです) を、沖縄では「生年」といって盛大に祝う。この生年祝いの習慣は本土にもかつてはあったらしい。なぜ祝うのかというと、実は生年は「厄年」だから。厄はひとりで背負うと重いので、みんなでお祝いしながらちょっとずつ分担しあうのだとか。まこと心優しきときたり。

最近、「まだまだ若いのに、なにが還暦だ! 」とお祝いしない方もいるようですが、ここはひとつ盛大に祝って、厄の相互扶助とともに「還暦以後」の景気付けを。

(一弓)

